

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	栃木県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	藤原町立藤原中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数 18
学級数	2	3	3	0	8	
生徒数	66	107	85	0	258	

研究の概要

1. 研究主題

『基礎・基本の定着を図り、学ぶ意欲を高める教科指導のあり方』  
～ 評価を生かしたわかる授業を展開するための指導方法・指導体制の工夫～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ・ 全学年・数学  
生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。  
指導方法の工夫改善に関わる加配があるため。
- ・ 1年生・英語  
生徒の理解の状況に差が出やすい教科，学年であるため。  
指導方法の工夫改善に関わる加配があるため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 数学科・英語科における指導方法・指導体制を工夫した評価を生かしたわかる授業の実践的研究 テーマ設定の趣旨</p> <p>ア 教育の今日的課題から 現行の学習指導要領は、「ゆとりの中で特色ある教育を展開し、子どもたち一人一人に『生きる力』を培っていくこと」を基本的なねらいとし、教科指導においては、「自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」である「確かな学力」の育成を求め、目標に準拠した評価も導入された。 これらを受けて、本校においても、指導に生きる評価を工夫・改善し、個に応じたきめ細かな指導の充実による「確かな学力」の向上をめざそうと考えた。 また、学力向上フロンティアスクールにおいては、以下の内容について研究することが求められている。 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善 選択教科や学習習慣を身に付けさせる指導 等</p> <p>イ 学校教育目標の具現化から 本校は、『自ら生きる』『共に生きる』『未来を拓く』を教育目標とし、学力向上を目指した学習指導のあり方『学ぶ意欲を高め、基礎・基本の定着を図る教科指導のあり方』を重点目標に、『基礎・基本の定着の指導の徹底と学ぶ力を身につけさせる教育の推進』を努力点の一つに挙げ、その具現化に努めている。 努力点の具体化にあたっては、生徒にとって学校生活の中心は、日々の授業であることを再認識し、「自ら学び自ら考える力を育成する」新しい学力観に基づいた教科指導のあり方を再構築し、きめ細かな教育を日々の授業実践に求め、改善に努めることが重要であると考えた。</p> <p>ウ 生徒・保護者の実態から 本校の生徒は、一般に素直で明るく、授業の導入時は活発に取り組む。 平成15年7月に実施した意識調査によると、学習の必要性については約85%の生徒が『必要だと思う・だいたい思う』と答えるものの、学習す</p>
--------	--

平	<p>ることが好きかについては『そう思う・だいたい思う』と答える生徒は約 25 % と少なく、その傾向は 1 年生 36 %、3 年生 24 % と学年が上がるにつれ減っている。学習の必要性は認めているものの学ぶ意欲は高いとはいえない。また、予習・復習については、『やっている・だいたいやっている』と答える生徒は約 32 % と少なく、その傾向は 1 年生 50 %、2 年生 26 %、3 年生 21 % と学年が上がるにつれ減っていることなどが、家庭学習の習慣が定着していないことがわかる。なお、約 76 % の生徒が授業に必要なものを忘れずにきちんと『準備している・だいたい準備している』と答え、その割合は内容を考慮すると多いとはいえない。一方、保護者は、一般的に率直で、学校に対して協力的な家庭と比べると、家庭の差が顕著である。平成 15 年 7 月に実施した意識調査によると、心豊かな子どもを育成してほしいと願いつつも、受験競争に即応する学力を身に付けさせてほしいと願っている。習熟度別の学習を『続けてほしい・だいたいそう思う』と答える保護者は約 80 % である。これらことから、生徒一人一人に基本的学習習慣を充実させるよう共通に指導するとともに、「確かな学力」の必要性について保護者に啓発していく必要がある。さらに、学ぶ意欲を高め、基礎・基本の確実な定着をめざす「個に応じたわかる授業」をどう展開していくか実践研究していきこう考えた。</p>
成	<p>工 教科指導の本校の実態から      本校の教科指導は、日々の職務に追われながらも、教師の熱意を基盤に、充実した授業を実践している。平成 15 年 7 月に実施した意識調査によると、授業については約 77 % の生徒が『わかりやすい・だいたいわかりやすい』と答え、その傾向は 1 年生 84 %、3 年生 51 % と学年が上がるにつれ減っている。また、教研式 C R T（平成 15 年 3 月実施）の結果から、基礎・基本が十分に身につけていない生徒が全国比と比べて多いことがわかった。</p>
15	<p>数学科においては、平成 14 年度まで 8 年間、第 1・2 学年においては異教科教師とのチーム・ティーチング（以下 T T と記す）を、第 3 学年においては単元を通して数学の免許を有する教師による習熟度別学習（1 クラスを 2 クラスに分割）を実践してきた。平成 15 年 7 月に実施した意識調査によると、T T については、約 83 % の生徒が『わかりやすい・だいたい思う』と答え、約 82 % の生徒が『続けてほしい・だいたい続けてほしい』と答えている。また、習熟度別学習については約 78 % の生徒が『わかりやすい・だいたい思う』と答え、約 80 % の生徒が習熟度別授業を『続けてほしい・だいたい続けてほしい』と答えている。また、教師が陥りやすい授業として、次のような傾向が見られた。</p> <p>教師主導型の授業      補充的な指導・発展的な指導の不足      内発的な動機づけの不足 等      1 単位時間の目標・評価の不明瞭      知識注入型の一斉授業 等</p>
年	<p>これらことから、基礎・基本の確実な定着をめざす方策として、補充的な指導や発展的な指導を含んだ「評価を生かした指導」をどう工夫していくか実践研究していきこう考えた。さらに、T T や習熟度別学習をどう継続発展させていくかについても実践研究していく必要がある。</p> <p>研究主題についての基本的な考え方</p> <p>ア 基礎・基本とは      「基礎・基本」とは、学習指導要領の各教科等の目標、内容として定められたものを意味し、関心・意欲・態度、思考・判断、表現・技能、知識・理解と基本的生活能力を示す。研究主題を達成するためには、「学力」および「基礎・基本」について共通理解する必要がある。本校においては「学力の構造」を 3 層として捉えている。つまり、『確かな学力【ウ】』は、『基礎・基本【イ】』及び『基本的生活能力【ア】』を含んだものとする。</p> <p>「基本的生活能力」は、何かを学ぼうとしたときに、その学習を可能にする基本的な力を意味し、客観的なデータで示せる読み・書き・計算と基本的学習習慣を基盤とした学習態度を示す。「確かな学力」は、学習指導要領が求める学力である『学ぶ意欲』『学び方』『問題解決能力』『課題発見能力』などと「基本的生活能力」及び「基礎・基本」を含んだ能力を示す。</p> <p>イ 学ぶ意欲とは      「学ぶ意欲」とは、「進んで学習に取り組もうとする意志」や「やる気」といった、情意面の能力を示す。学ぶ意欲は、学力を養う基盤であると考えた。学ぶ意欲を高めるには、「わからない」ことが「わかる」ようになったり、「できない」ことが「できる」ようになったりする経</p>

験を積み重ね成就感・達成感・満足感を実感させる必要がある。また、「やる気のでる授業」とは、どんな授業か」調査してみると、「授業の内容がわかる」や「自分で問題が解ける」等である。つまり、学ぶ意欲を高めるには、基礎・基本を確実に定着させる必要がある。さらに、学習習慣を身に付けさせるなど基本的学習習慣を身につけさせることやその前提となる生徒の実態把握も必要である。

ウ 評価を生かしたわかる授業とは  
 授業は、ゆとりがあり楽しく生徒が意欲的に活動するものでありたい。しかし、生徒が好むことをやらせておけばよいというものではない。教えるべきことは徹底して教え、生徒の活動にゆだねるべきことはゆだねるべきである。

基礎・基本の定着を図り、学ぶ意欲を高めるには、評価を生かしたわかる授業を展開する必要があると考えた。そのためには、生徒には素晴らしい個性があり、学習を進める上では、習熟度（学習速度、理解度）や興味・関心等の個人差があるため、限られた時間内に同じ内容を、同じ方法で身につけるには難しい場合があることを認識し、指導方法・指導体制を工夫した、個に応じた授業を展開しなければならない。そして、目標に応じた適切な指導計画と、生徒のつまずきや伸ばしたい内容を評価項目とし、その評価方法と評価結果のフィードバックを含んだ評価計画を作成し、学習過程における評価を生かした指導の工夫が必要である。

なお、評価を生かしたわかる授業を展開するためには、教師が学力観・生徒観・指導観の転換を図らなければならない。つまり、「知識を教える教育」から「自ら学び自ら考える教育」への転換である。また、生徒の実態を十分に把握するとともに、全職員が一致して基本的学習習慣の確立に努めることも必要がある。

平成

15

年

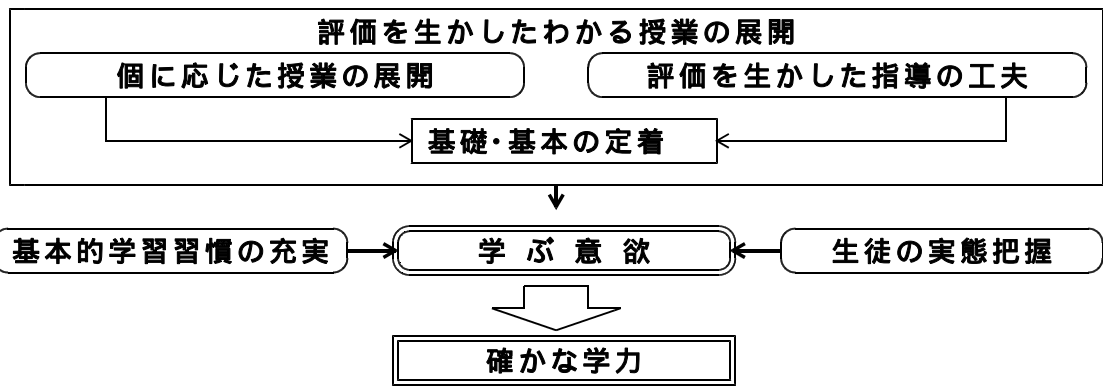


図2 評価を生かしたわかる授業と学ぶ意欲，確かな学力の関係

**研究の仮説**

基本的学習習慣の充実を図り、生徒の実態に応じた評価を生かしたわかる授業を展開すれば、基礎・基本の定着が図られるとともに、学ぶ意欲が高まり、確かな学力が身につくであろう。

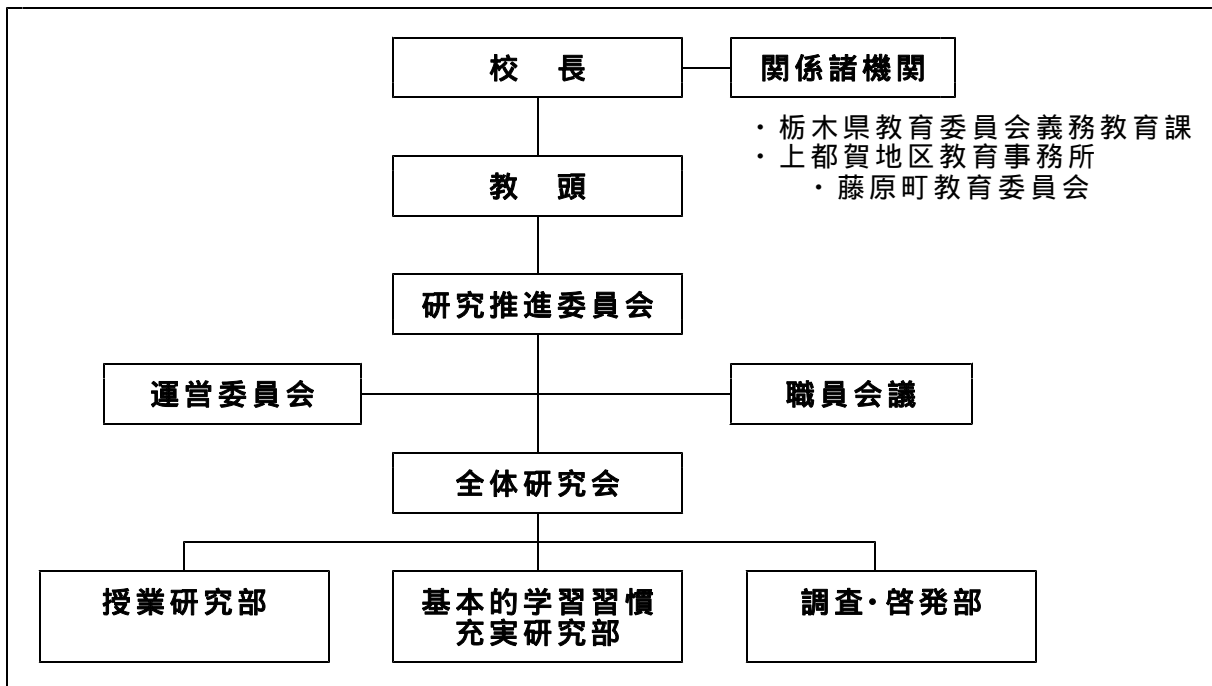
**研究の内容・方法**

度

課題	評価を生かしたわかる授業の展開		基本的学習習慣の充実	生徒の実態把握
	個に応じた授業の展開	評価を生かした指導の工夫		
研究の内容・方法	夫総態活 夫科一ゲ習 工複形材五上語イン学 の（習入研の英テ手別 法別学の践制・る一度 科なそ材 方への域実体科けイ熟究教様と教 導二）地の導学おテ習研折多設ひ 指「化・用指数にムやの選之開及	け 適及作 イ指導るる作 にお 究た画の フくのめが の用 程の 研し計画 のクめ高 な実表活 過（指 描 果ツたを発つ千価の 価に指 結八の欲開にの評そ 学る目切ひ成評二導八教意評目成	「授業の受定 け着 家庭習をる 家正研 習せ を室のり 学高・環 習の意欲教至く	生徒の意・查 生調態実 の查 識美の 者調施 保意の 護識美 保の料 護啓の
研究組織	授業研究部		基本的学習習慣充実研究	調査・啓発部

平成16年度	<p><b>テーマ</b> 指導方法・指導体制を工夫した評価を生かしたわかる授業の実践的研究</p> <p><b>研究の見通し</b> ア 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発を全教科において実施する。 イ 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善を全教科において実施する。 ウ 自己評価表の活用による自ら学ぶ生徒の育成に努める。</p> <p><b>研究の内容・方法</b> ア 数学科・英語科においては、習熟度別学習の研究授業を実施する。 イ 数学科・英語科以外の教科・領域では、外部人材の活用をも含めた多様な指導方法・指導体制の工夫をブロック研究会を中核として実施する。 ウ 個に応じた指導のための教材開発をブロック研究会を中核と推進する。 エ 「授業のルール等を定着させる指導」の一層の充実と、「家庭学習の習慣を身に付けさせる指導」を推進する。</p>
--------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究の成果

(1) 習熟度学習や教師による協力的な指導(TT)を工夫することができた。数学科や英語科は、習熟度(学習速度, 理解度)差が顕著に現れる教科である。そのため、限られた時間内に同じ内容を、同じ方法で身につけるには難しい場合がある。そこで、目的に応じた多様なチーム・ティーチングにより個に応じた授業の展開に努めている。

ア 数学科におけるチーム・ティーチングや習熟度別学習  
 中学2年数学「平行と合同」において、オリエンテーションと「1節 平行線と角」を1C2Tの協力教授で、「2節 合同な図形」では、理解度などの習熟度に差が生じてくることが予想されるため、習熟度別に2つのコースに分けて少人数で授業を実践した。習熟度別学習では、2コースそれぞれの最終目標を設定し、それらが達成できるような指導計画を作成した。コース選択に当たっては、単元はじめのガイダンスやチェックテスト、自己評価表などをもとに、生徒に主体的に判断させていくが、適切な選択ができない場合は、教師が助言するなどして配慮した。

節	平行線と角							合同な図形								
時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
TTの形態	協力教授(1C2T)							習熟度別学習								

図1 2年数学「平行と合同」におけるTTの形態

イ 英語科におけるティーム・ティーチングや習熟度別学習

中学1年英語「PROGRAM

8 Eメールを書こう」に  
おいては、第1学年という  
こともあり、「話す」「読む」  
活動においては習熟度の差は  
あまり現れないが、「書く」  
活動において習熟度差が見ら  
れる。

学習過程	ティーム・ティーチングの構成
導入	掛け合いでの紹介
展開	少人数集団(グループ)に分けての支援
まとめ	分担しての評価

図2 1年英語におけるTTの形態

そこで、「話す」「読む」活  
動においては、1C2Tの協力教授の授業を、単元末の「書く」活動にお  
いて習熟別学習を実践した。なお、1単位時間における協力教授は、上  
のような構成で実践すると有効であることがわかった。

(2) 個に応じた指導のための指導方法を社会科や理科、英語科において工夫  
することができた。

ア 興味関心高める課題選択学習

単元で学習した  
内容を「もう1度  
やり直したい」「も  
っとくわしく調べ  
たい」「  
をつくりたい」という生徒  
の願いや、身に  
つけた基礎・基本  
を補充・発展させ  
るために、単元末  
に課題選択学習を  
取り入れるよう努  
めている。

次の中から課題を選択し、自分で調べよう。		
NO	課題名	参考図書
A	水の中の小さな生物の観察	教科書 P 7 図 3
B	いろいろな花のつくりを調べる	教科書 P 15 観察 1
C	茎のつくりを調べる	教科書 P 21 観察 2
D	葉脈の観察	教科書 P 23 図 1 2
E	葉の表面や断面を調べよう	教科書 P 23 観察 3
F	蒸散によって出る水の量の測定	教科書 P 24 図 1 5
G	光合成の実験	教科書 P 31 図 2 0
H	植物の呼吸を調べる	教科書 P 32 図 2 1
I	身近な野菜を調べよう	教科書 P 37 科学の広場
J	自由課題:	

図3 1年理科における課題選択学習の課題例

右の例は、中学  
1年理科「植物の  
くらしとなかま」  
における課題例である。課題選択学習は、単元末テストの後に位置づけ、  
テストの結果が「努力を要する」と判断される生徒には、類題のプリント  
で復習してから取り組ませた。なお、課題選択学習を位置づけることは、  
単元の始めのガイダンスの際に知らせるとともに、毎時間のワークシート  
の自己評価の記述欄に、「もう1度やり直したい」内容や「もっとくわし  
く調べたい」内容等を記述しておくように指示しておいた。学習活動は、  
3時間扱いとし、学習の成果は、結果等の考察を含む簡単なレポートの作  
成と、その発表により行った。同じ課題どうし、グループになるかどうか  
は、生徒に判断させたが、ほとんどがグループによる活動になった。1年  
生の始めということもあり、課題追究に入るまでに時間を要した。

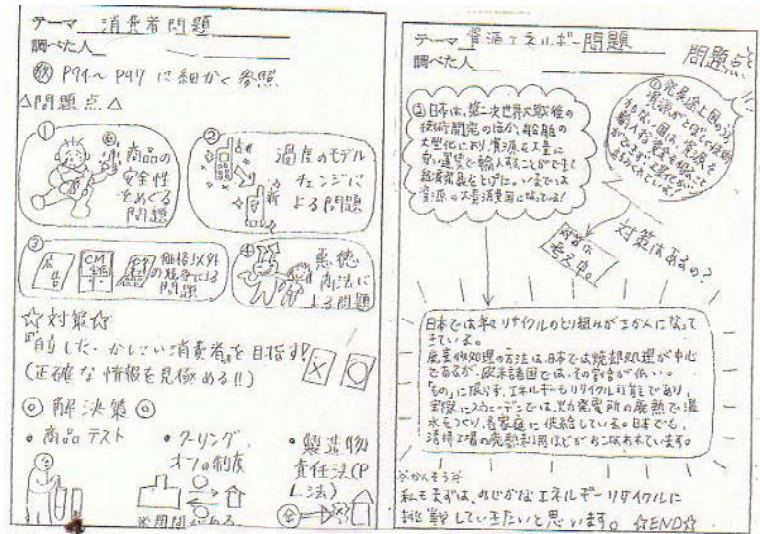
イ 社会科における  
ジグソー学習の導  
入

生徒に学ぶ力を身  
に付けさせるには、  
「調べる」「話し合う」  
「まとめる」「発表す  
る」という学習活動  
を展開する必要がある。

しかし、個人で調  
べた内容をクラス全  
体に発表する形態を  
とると、技能や意欲  
などの個人差が大き  
くなる。

そこで、中学3年  
社会において、共通  
課題を4人1組のジ  
グソー学習を取り入  
れた。

この学習法では、



ジグソー学習の発表用資料

図4 3年社会科におけるジグソー学習の例

少人数グループによる活動を多くり入れられるとともに、話し合いを活動の途中にも取り入れることができる。発表に苦手意識をもつ生徒も少人数への発表ということで、無理なく活動に取り組めた。

また、発表を得意とする生徒は、発表用に別の資料を工夫して準備するなど、質の高い学習活動を展開できた。

(3) 評価規準や評価方法を明確にした評価計画を作成し、学習過程における評価とその結果のフィードバック(指導)が可能になった。評価計画表を作成するに当たっては、できているか否かを記録する評価よりも、「できていないからここをこう教える」「できているから先を考えさせる」という考えで評価にあたる(指導と評価の一体化)。そのため、毎時間あるいは小単元(数時間程度)のまとまった内容ごとに、具体的評価規準である「おおむね満足できる」状況(評価規準)と「十分満足できる」状況、そして「努力を要する」と判断される生徒への具体的な支援の手だてを明確にし、個にに応じている。なお、「十分満足できる」状況は、「おおむね満足できる」状況の生徒のうち、実現状況が量的・質的に高まりや深まりが見られたときと判断するように共通理解した。

(4) 単元ごとの自己評価表を作成して、自己評価力の育成に努めた。  
下の図は、中学2年数学「平行と合同」の自己評価表の一部である。意欲を高めるには、「わからないこと」が「わかる」ように、「できないこと」が「できる」ようになっていく経験を積み、達成感・達成感・満足感を実感させる必要があると考える。そのためには、自分の学習を振り返り、「何がわからないのか」「何ができないのか」を自己評価する力を育てなければならない。これは、自ら学び自ら考える生徒の育成にもつながると考える。

【自己評価】 自信がある... A, 少し自信がある... B, あまり自信がない... C, 全く自信がない... D					
時	学習の目標	教科書	自己評価	わかったこと・気がついたこと	先生から
1	合同の意味を理解し、対応する辺や角を求めよう。	P 94		※文章による記入する欄を設けることにより、生徒の理解度やつまづきをより具体的に把握することができ、個別指導に生かすことができる。	
		P 95			
2	2つの三角形を作図しながら、合同条件を考え、理解しよう。	P 96			
		P 97			
3	合同条件を利用し、合同な三角形を見つけよう。	P 98			
		P 99			

図5 中学2年数学「平行と合同」自己評価表

(5) 選択教科において、教科やコース選択のためのガイダンスを充実するとともに、多様なコースを開設することができた。

教科やコースを選択するガイダンスは、右の表のような順序で実施し、その充実に努めた。その結果、平成15年度は、第1学年においては補充的・発展的学習コース1コマ、第2学年においては補充的・発展的学習コースと発展的・課題学習コースの2コマ、第3学年においては補充的・発展的学習コース3コマ、発展的・課題学習コース2コマ合計5コマの選択教科を開設することができ、選択履修幅の拡大に努めた。

順序	内容	実施時期
1	コース開設の生徒への希望調査	1月下旬
2	コース開設第1次案の作成	2月中旬
3	コース開設第1次案の検討	3月上旬
4	ガイダンス資料の作成・配布	4月上旬
5	生徒への説明会	4月上旬
6	第2回アンケートの実施	4月上旬
7	学級担任、教科担任との相談	4月中旬
8	選択教科最終決定・選択教科の開設	4月中旬

図6 選択教科開設までの順序

なお、補充的・発展的学習のコースにおいては、生徒の学習の実現状況に応じた教師による学習プログラムを指導計画及び評価計画に反映させ、発展的・課題学習においては、生徒による学習課題の自己選択を指導計画・評価計画に反映させた。多様なコースを開設することで、基礎学力を定着させる指導が可能になった。

(6) 授業の受け方を同一歩調で指導するため『授業の受け方』を作成し、月ごとに重点目標を決め、その定着を図っている。

## 2. 今後の課題

- (1) 習熟度別指導や教師による協力的な指導(TT)を一層推進する。  
 (2) 外部人材の活用をも含めた多様な指導方法・指導体制を工夫していく。  
 (3) 発展的な学習や補充的な学習などの個に応じた指導のための教材開発を一層充実させるとともに、自己評価表の活用による自ら学ぶ生徒の育成に努める。  
 (4) 朝の学習など課外の時間の学習をどう推進するか実践研究する。  
 (5) 家庭学習の習慣を身に付けさせる指導を推進する。

### 学力把握のための学校としての取組

学習に関する生徒の意識調査	学習全般に関する生徒の意識の変化を把握する。
目的	「学習意欲」「授業態度」「家庭学習」「複数教師による指導」等に関する意識の変化をアンケート4段階方式で調査する。
実施内容	
時期	平成15年7月、平成16年4月・7月
学校の活動に関するアンケート調査	学校の教育活動に関する保護者の意識を把握する。
目的	「学力向上への取組」「学習に関する学校の取組についての知識」「授業の充実度」「家庭学習への取組」等に関する意識の変化をアンケート4段階方式で調査する。
実施内容	
時期	平成15年7月・12月、平成16年4月・7月
学習に関する調査	数学科、英語科の学習に関する意識の変化を把握する。
目的	「学習意欲」「授業態度」「複数教師による指導」等に関する意識の変化をアンケート4段階方式で調査する。
実施内容	
時期	平成15年12月、平成16年7月
教研式CRTテスト	観点別学習実現状況を把握する。
目的	「国語科」「社会科」「数学科」「理科」「英語科」の学習内容の実現状況を調査する。
実施内容	
時期	平成15年2月、平成16年2月

### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成15年度上都賀地区学習指導研修会	平成15年11月20日 藤原町立藤原中学校
期日・場所	
テーマ・内容	「個に応じた指導方法・指導体制の在り方」 数学科・英語科の公開授業
参加対象	上都賀地区小・中学校教員
平成15年度藤原町校長研修会	平成15年12月8日 藤原町立藤原中学校
期日・場所	
テーマ・内容	「学力向上フロンティア校としての取組」
参加対象	藤原町小・中学校校長
平成15年度藤原町教務主任研修会	平成15年12月11日 藤原町総合文化会館
期日・場所	
テーマ・内容	「学力向上フロンティア校としての取組」
参加対象	藤原町小・中学校教務主任

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】  15年度からの新規校  14年度からの継続校
- 【学校規模】  3学級以下  4～6学級  
 7～9学級  10～12学級  
 13～15学級  16学級以上
- 【指導体制】  少人数指導  T・Tによる指導  
 その他
- 【研究教科】  国語  社会  数学  理科  
 外国語  音楽  美術  技術・家庭  
 保健体育  その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】  有  無